

日本も元気にする 青年海外協力隊

奈良編

世界を
元気にした人は、
日本も
元気にできる！



国際貢献で培われた力をいざ、奈良で

その経験を奈良で活かし

“もっと広い世界を見てみたい”

“人間としての幅をひろげたい”

そんな想いを胸に国境を越えた6人の青年海外協力隊員。

さまざまな経験を積んで帰国した6人が

いま、ここ奈良で活躍をみせている。

なぜ彼・彼女たちは活躍しているのか？

それは遠い異国の地にも、この奈良にも、

解決すべき課題があり、支えを求める人々がいるから。

青年海外協力隊から始まり、今もそれぞれの職場で

悩み、走り、輝きつづける6人のストーリー。

世界へ羽ばたく夢を心に秘めたあなたにも届きますように。



その経験を日本の未来へつなげる

P.03



バングラデシュの人々と、
看護について学びあう日を夢見て。

田中 里奈さん

赴任地

バングラデシュ



奈良県奈良市
奈良学園大学 保健医療学部
看護学科 助手

P.05



研究と育種をつなぐ存在となり、
日本の農業の発展に貢献したい。

白戸 陽子さん

赴任地

フィリピン



奈良県天理市
株式会社大和農園 種苗部 育種課 主任

P.07



どこの国でも子どもは同じ。
学ぶ喜びを伝えていきたい。

池下 昌弘さん

赴任地

サモア



奈良県大和郡山市
大和郡山市立郡山北小学校 教諭

P.09



女性消防職員のパイオニアとして、
たくさんの命を救っていきたい。

竹内 綾子さん

赴任地

マラウイ



奈良県奈良市
奈良市消防局 情報救急室
救急課 消防士長

P.11



オセアニアの島々での
伝統の継承を支援したい。

長岡 拓也さん

赴任地

ミクロネシア



奈良県橿原市
NPO法人パンフィカ・ルネサンス代表

P.13



大好きなバレーボールを通じて、
出会った人々に恩返しをしたい。

梅崎 さゆりさん

赴任地

エチオピア



奈良県天理市
天理大学 体育学部 講師

バングラデシュの人々と、 看護について学びあう日を夢見て。



田中 里奈
RINA TANAKA

赴任地
 **バングラデシュ**
 赴任地での職種(活動分野)
感染症対策

奈良県奈良市
奈良学園大学 保健医療学部 看護学科 助手
 看護大学で看護学を学び、卒業後、外科病棟に勤務。その後、大学院に進学し急性期看護学を修了。就職が決定していたが、現場の課題を解決できる力をつけようと青年海外協力隊に応募し、参加。赴任先では、フィラリアという感染症の対策に従事。現在大学では、3年生に精神看護学を指導している。

看護教育の現場で、実践の大切さを学生とともに学ぶ。

奈良学園大学は、看護師、保健師、助産師の資格が選択で取得できる統合プログラムを採用している看護大学。少人数担任制で、教室で行う授業は、教員と学生の距離が近い。田中里奈さんが今年の春から受け持っている3年生は、精神看護学を学ぶ学生たちで、病院での半年間の実習を行っている。昨年まで基礎看護学を教えていた田中さんにとっても新しい領域で、「学生と一緒に勉強しています。人を理解するために、傾聴すること、共感

することが大事なのですが、実際にやるのは難しいことです。バングラデシュでも、言葉は違ってわかりあえる瞬間がありました。同じ人間だから、気持ちで寄り添うことに国や人種は関係ないですね」と語る。青年海外協力隊参加に際しても、看護の資格をいかした職種もあったなか、現地の人々と直に接することのできる「感染症対策」という職種を知り、田中さんはあえてその職種を選び、人々と寄り添うことを実践した。

予防という概念がない国で 正しい知識の普及に奮闘。

フィラリア症は寄生虫によって引き起こされるリンパ管の病気で、症状が悪化すると足が象のように腫れあがる象皮症になる。感染しても死亡するケースは稀であるため、対策が遅れた背景がある。しかし、一度かかると完治しないことが問題で、適切な予防と処置が必要だ。田中さんは現地のフィールドワーカーとともに家を順番に訪ね、駆除薬を配り、正しい知識を伝える草の根活動を行った。とはいえ、病気を予防するという概念がない国での啓蒙活動は大変だった。「予防するための駆除薬を配っても、悪い噂が流れて捨てられることもしょっちゅうあったんです」という。そんな想定外の展開が続いても、田中さんは持ち前の粘り強さと明るさで地道に活動を続け、現地の担当者たちが主体的に地域住民の保健衛生を改善しようとするまでになった。



先生方の助手として、新たな分野を勉強中。



学生と話をするときの笑顔が印象的な田中さん。

「教える」ことは 「学ぶ」ということ。

さらに、現地の軍の病院には立派な設備があるにもかかわらず、情報や知識がないゆえに十分活かされていないのを知り、日本のNGOが実施していた看護教育のプロジェクトに協力した。こうした経験が、「教えることの意味」へとつながり、現在の仕事につながっている。「やはり教育が大事ですね。自分が深く理解し、教育現場に立ってつなげていくことで、次の世代に教育が広がっていく。だから自分も毎日が勉強です」。

上司に
聞く!



奈良学園大学 保健医療学部 看護学科 教授(看護管理学) **若林 たけ子**さん
 大学時代の田中さんは、実習先の病院で目の前の患者さんの状態を見て、少しでも役に立とうとひたむきに努力していました。判断力と行動力がある人なので、帰国後にこの大学の助手として推薦し、新しい分野でがんばってくれています。今ではあらゆる先生方から力を貸してほしいと田中さんに声がかかります。

生きるための優先順位を 見つめ直す機会をもらえた。

バングラデシュではイスラム教を中心にした生活が営まれ、女性は夜ほとんど出歩くことができない。フィラリア症予防啓発ドラマをJICAと共同制作し、夜間上映会を実施した際にも、集団で行動してもらい、スクリーンのそばで見ってもらうなど、工夫が必要だった。活動中に「2015年度までに制圧する」というWHOの目標は達成できなかったものの、「予想外のことが起こっても対応する力を蓄えることができた」と田中さん。宗教と家族を大事にし、季節に応じた生活をしている人々と暮らしをともにして、田中さんは、「バングラデシュでは、人を思いやる、人に寄り添うという気持ちが大変強く、日本に帰ってから、何のために働く

のか、何のために生きるのかを強く考えさせられました」という。



小学校で行った啓発活動。



地域の健康を守るためにともに働くフィールドワーカーたち。



地域の保健担当者や問診を行いカルテの記載方法を指導している様子。

青年海外協力隊を目指すみなさんへ

まずは生活をともにし、
受け入れてもらうことから。

歓迎されると思って現地へ行ったのに、そうではないこともあります。文化も宗教も習慣も全く違う国で、そういう状況の中に置かれて初めて、自分なりに解決してゆける力を少し身につけることができたと思います。現地の人とともに悩み、ともに励みながら、その土地に適した方法を見出す経験は、協力隊だからこそできます。人生観がきっと変わるはず。

研究と育種をつなぐ存在となり、日本の農業の発展に貢献したい。



白戸 陽子
YOKO SHIROTO

赴任地
フィリピン
赴任地での職種(活動分野)
組織培養

奈良県天理市
株式会社大和農園 種苗部 育種課 主任
10歳の頃に母から聞いた青年海外協力隊に興味を持つ。大学院で農学の植物遺伝育種を専攻研究し、身近にいたJICA国際協力推進員の話聞いて応募。大学院修了後にフィリピンで2年間イチゴと花の組織培養の指導を行う。帰国後、株式会社大和農園に就職し、ニンジンとゴーヤの育種を担っている。

稀少な女性ブリーダーとして、良質な種子を育てる日々。

野菜の種子を開発して販売する株式会社大和農園は、2020年に100周年を迎える歴史ある企業。野菜を中心に品種改良を行い、種子や苗を生産して農家などに販売する。白戸陽子さんは同社で、ニンジンとゴーヤの育種を担当している。どうやったら生産量が均一になるいい種子ができるか、どれを選抜すれば早くまく育つかなど、品種改良や遺伝子について日夜研究、開発するために、常にニンジン・ゴーヤと向き合っている。成果を得るまで10年ほどか

る大変地道な仕事で、「ブリーダー」ともいい、女性のブリーダーは大変少ない。
「本当は、ブリーダーになりたかったわけではないんです。でも、『自分に合っている仕事をするだけが人生じゃない』と思っていました。」
置かれた場所で、精一杯考えて自主的に行動する。青年海外協力隊を経験したことで考え方もポジティブになり、いろんなことにチャレンジしたいと思えるようになったという。

フィリピンで培ったのは、相手を尊重する柔軟な提案力。



子どもの頃から理科が好きで、じっくり観察し、よく考えて行動するというおとなしい性格。いつも人の後ろにいて、あまり前になるようなタイプではなかった。そんな白戸さんが大学時代、隊員経験や海外在住経験のある人々に出会い、その話に強く惹きつけられた。「海外に出ると、人はこんなに変わるんだな」と感銘を受け、大学院時代に青年海外協力隊に応募。2年間、フィリピンの大学の組織培養を行う研究所へ派遣された。イチゴや花の培養システムの構築を計画し、現地スタッフに指導した。
「現地では、自分から仕事をつくらないとだめだなと思い、新しいことを提案する場面では、『こうやってみませんか?』と相手の気持ちに立って伝えるようにしました。そのときの経験があるから、今会社で重要な事を伝える際には、こちらの気持ちや考えだけではなく、相手を尊重しながら伝えるようにしています。」



育種だけでなく海外の取引先との交渉など業務も。



社会の役に立てるよう、得てきたことを還元したい。

帰国後結婚し、昨年には男児を出産、その3か月後に職場に復帰して仕事を続けている。「種苗の仕事は、ひとりの人間が約10年間かけて種子を取り続け、やっと成果が見えるという長いスパンの職種なんです。だから途中でやめたくないし、私の後に入社してきた女性たちが今後働きやすい環境になるように努めていきたいと思います」。今後は、日本の農業に貢献できるよう、「研究と育種をうまくつないでいける存在になれば」と考えている。



日中はほとんど畑に出て作物をチェックする日々。

上司に聞く!



株式会社大和農園 種苗部 統括部長 小野 吉正さん
白戸さんは、育児しながら、圃場実験室にバイタリティあふれる活躍をしてくれています。持ち前の物怖じしない積極性と国際的な価値観で、種苗業界の古めかしい慣習に新しい風を吹き込ませる存在になっています。今後も、青年海外協力隊での経験を活かした活躍を期待しています。

受け身では何も始まらない。自ら動く重要性を痛感した。

白戸さんが派遣されたフィリピンの大学の研究機関では、先にバナナの培養苗の生産を行っており、特に問題がなかった。「何か困ったことがある場所に自分が派遣されたと思込んでいたんですが、そうではありませんでした。最初はなぜ派遣されたのかわからず、戸惑いました。」
同地域に派遣された韓国のボランティアと一緒に農村や山間部へ足を運び、生産者の実態を把握するうち、「受け入れ先からの指示や依頼を待っているは何も始まらない」と気づいた。
自分から働きかけて、高収入が見込めるイチゴの培養方法を研究所のスタッフに指導し、現地で手に入る器具や試薬を

調べて自分に何ができるのかを考えた。「やりたいことがあるなら、足踏みしている暇はない」。
引込み思案だった自分が次第に変わっていくのを実感した。



配属先のスタッフたち。



イチゴ農家の方と白戸さん。

青年海外協力隊を目指すみなさんへ

情熱を持っている人は、きっと大丈夫です。

私は人見知りするタイプだったので、赴任した当初の6か月は毎日日本に帰りたと思うほど、現地の生活になじむのに時間がかかりました。顔を覚えてもらえるよう、現地の言葉であいさつしたりして、少しずつなじんでいきました。こんな私でも行けたのだから、情熱を持って「行きたい!」と考えている人はきっと大丈夫です。



イチゴの茎頂培養という顕微鏡を使った培養法を教えているところ。

どこの国でも子どもは同じ。 学ぶ喜びを伝えていきたい。



池下 昌弘
MASAHIRO IKESHITA

赴任地
サモア
赴任地での職種(活動分野)
小学校教育

奈良県大和郡山市
大和郡山市立郡山北小学校 教諭

大和郡山市立郡山北小学校教員になり、「外国語活動」として英語も教える。青年海外協力隊の「現職教員派遣制度」を知って応募し、2年間サモアの小学校で理科と算数を担当。帰国後は元の小学校に復職し、現在5年生の担任として、サモアの言葉や文化を授業で伝えている。

誠実に子どもたちと向き合い、頼りがいのある先生に。

全校で約560人の生徒を持つ郡山北小学校。大和郡山市で2番目に大きな規模の公立小学校だ。5年生29人を受け持つ池下昌弘さんは、各教科だけでなく、「外国語活動」として英語も教えている。文部科学省が小学校で2011年(平成23年度)より必修として進めている「外国語活動」は、外国語に慣れ親しませる活動を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、コミュニケーション能力を養うことを目標とした活動だ。担任の教室の壁には、丁寧に書かれた

文字の数々。そこには、「マイナスの言葉を使わず、お互いにいいところに目を向けよう」という思いが込められている。真摯な気持ちで子どもたちと向き合う池下さんの気持ちを表すかのような、丁寧に整った文字だ。「子どもは高学年になると精神的に成長し、思春期を迎えます。教員である自分のことも見られているので、姿勢をしっかり見せないといけない。ごまかさず嘘をつかず、失敗したら謝る。子どもたちとの信頼関係をそんなふう築いていこうとしています」。

教科書づくりから始まった 試行錯誤の日々。

派遣されたサモアの小学校では、小学5年生から8年生(日本の小学4年生から中学1年生にあたる年齢)の子どもたちに、算数と理科の指導を行った。サモアの教育現場に同期が10人派遣され、そのうち6人が小学校教員だった。「同じ悩みを共有できる仲間がいて幸運でした。国全体で教科書がないという教育現場で、同期と情報を共有し、自分たちで写真を使って教科書に代わるものを作りました」。

さらには、理科の実験の手順書などを、得意のパソコンで、デザインに工夫を凝らして作った。低学年は英語がわからないため、サモア語を勉強して、赴任1年後にはサモア語で授業ができるほどになっていた。サモアの小学校と郡山北小学校をスカイプ*でつないで遠く離れた子どもたちがリアルタイムで話をするという授業も実施。お互いの理解を深めるきっかけとなった。*インターネット回線を利用した通話機能。



学校の子どもたちにサモア語を紹介している。



かけがえのない仲間との 出会いが今も大きな原動力。

理科の授業で天体について教えていた時期は、子どもたちが「昨日は満月だったね」「習った星座を見つけたよ」と言うようになり、学習したことを生活でも活かしてくれるようになった。「朝の登校時にも、『今日は理科の授業があるね!』と声をかけてくれて、自分の授業を楽しみにしてくれていることが伝わり、大変うれしかったですね」。また、協力隊に参加して本当によかったと思うのは、人間関係の幅が広がったこと。「全国に、共に苦難を乗り越えた仲間がいることは幸せですね」。



真剣に向き合うことが子どもたちとの信頼関係を築く第一歩。

同僚に
聞く!



大和郡山市立郡山北小学校 教諭 堀口 拓人さん

池下先生はいつもおおらかでリーダーシップもあり、決めたことを最後までやり通す責任感の強さがあります。最初、サモアに行くとき聞いた時は驚きましたが、「池下先生らしいな」と思いました。帰国後も学級でサモアのあじさつを紹介するなど、サモアの文化を積極的に発信していますね。

違う価値観を受け入れ、 同じ目線に立つことが大切。

赴任後半年たって、現地の教師と大ゲンカをしたという池下さん。サモアの教師は生徒に大変厳しい反面、平気で授業に遅刻する。意見を言うと「あなたはボランティアのくせに何もわかっていない。さぼっているわけじゃない」と言い返され、ショックを受けた。「日本人は、「時間に遅れる=ルーズ」と思いがちですが、それはその国の時間の価値観。それを受け入れる余裕が自分にはなかったと気づきました。その先生から「明日は笑顔で会おう」とメールが来て、次の日はいつも通りのいい関係に戻ることができました」。

年上を大事にする文化は日本とも似ているが、「海外で暮らすうち、日本を客観的に見るようになることができようになり、日本の文化や

価値観が必ずしも正しいわけではないんだなと気づきました」と、柔軟な考え方ができるようになったそうだ。



悪戦苦闘しながら初めてコンパスや分度器を使う子どもたち。



算数の授業の様子。



配属先のイバ小学校の先生方12名と記念撮影。

青年海外協力隊を目指すみなさんへ

どんな事にも対応できる力が 身につきます。

「日本の学校教育の現場を2年も離れて、わざわざ行った意義や目的は何だったのですか?」と聞かれたことがあります。僕の場合は、「自分の成長」と答えました。言葉も通じないところに放り込まれて、自分は何ができるか。その対応力がしっかりつくのではないのでしょうか。教員としても人間としても、成長できたかなと思います。

女性消防職員のパイオニアとして、 たくさんの命を救っていききたい。



竹内 綾子
AYAKO TAKEUCHI

赴任地
マラウイ
赴任地での職種(活動分野)
体育

奈良県奈良市
奈良市消防局 情報救急室 救急課 消防士長
大学卒業後、バックパッカーとしてカンボジアを訪れたのがきっかけで、海外の状況に関心を抱き、青年海外協力隊に応募。マラウイ教育研究所に配属になり、学校体育に関する普及活動を2年間実施。帰国後、市消防局に採用され、救急隊として現場で勤務。現在は局本部の救急課で統括事務を担当。

命の重さに国境はない。救える命を救いたい。

国際文化観光都市として多くの外国人観光客が訪れる奈良市。竹内さんは、青年海外協力隊での経験を活かし、外国語対応職員として登録している。旅先で具合が悪くなったりケガをしたりした外国人旅行者に対応する職員だ。医療英語のスキルアップのため、今も週に1度自主的に英会話レッスンを受けており、外国人の救急時に頼られる存在となっている。「たとえば痛みひとつとっても、だるい痛み、刺すような痛み、重たい痛みなどさまざまですね。看護師の教科書を

参考に、プライベートレッスンを行ってもらっています」。

現在の職場は、市の救急業務を統括するという仕事で、後方支援やシステムづくりを課全体で行う。大切なのはコミュニケーション能力で、救急要請時には、まず相手の信頼を得て状況を聴取し、素早く現状を把握することが求められる。「現場にはいろいろな患者さんがいますが、それぞれの生活背景などを見てその人に合わせるといふ経験を積んできたので、対応はうまくできるほうだと思います」。

どうすれば「体育」という教育を伝えることができるだろうか。

竹内さんがマラウイでまず感じたのは、「体育」をスポーツとして見るだけで、教育として考える概念がなかったこと。教員も、用具が整っていないことを理由にあまり動こうとしない。どうやったら、みんなが楽しんで体育ができるようになるだろうか。そして、教師や教育の質を上げるには…。竹内さんならではの工夫が始まる。「エアロビクス運動」のビデオを取り寄せ、授業として提案した。竹内さん自身、大学の授業で受けただけで専門家ではなかったが、音楽を使って楽しむ体操として取り入れたところ、ダンス好きなマラウイの人々に受け入れられる。ほかの隊員らと「健康教育分科会」も立ち上げ、日本の運動会をベースに各地でスポーツイベントを開催。「運動の楽しさや健康に対する関心を持ってもらうきっかけになりましたね」。マラウイ全土20か所以上で健康教育イベントを開催した。



消防音楽隊にも所属し、小学校訪問演奏会等の広報活動も行っている。

数々の現場経験を活かし、 救急のプロとしてさらなる高みへ。

そんなふうには、着実なステップでひとつずつプロジェクトを実現させてきた竹内さん。2009年には協力隊OBである同期職員と結婚し、2012年には、高度な医療処置が現場で行える救急救命士の国家資格を取得。国際協力にかかわろうと、長年の夢だった国際緊急援助隊医療チームにも登録。2015年には地震に見舞われたネパールへ医療調整員として派遣された。2年前に、救急現場の声をくみ上げて統括する本部に異動になった。これまでの現場経験を生かし、大きな視点で運営を考える重要な立場として、ますます頼りにされている。

上司に
聞く!



奈良市消防局 情報救急室 救急課 救急指導担当 消防司令補 安原 誠吾さん
竹内さんは、何ごとにも一生懸命で、しっかりした考え方を持っている人です。意見を率直にずばり言ってくれるので助かります。青年海外協力隊での経験を活かし、救急時の外国語対応ができるのも強み。今後、救急隊員の後輩を指導していく立場として、まちがいなく人を引っ張っていく人材ですね。

日本での常識を押しつけず、 現地の生活に溶け込む力を。

マラウイは、アフリカで最も貧しいといわれている国だ。医療施設も都市部以外は整っておらず、平均寿命は世界で最も低い。(竹内さんが滞在した2004年当方で37歳。2012年調査で47歳)。竹内さんは滞在した町で、水を大切にしようと、バケツ1杯の水で風呂を済ませ、現地の公用語も身につけて、徐々に現地の生活に溶け込んでいった。

日本で取得していた日本赤十字社の救急法と水上安全法の資格を活かし、近隣の小学校で、教員に向け救急処置の仕方の講習会を行った。この実技指導は好評を得たが、継続的に行うことができればなかなか定着しないもどかしさも

感じた。「日本のやり方を押しつけずに、どういふ改善点があるかを現場でじっと観察し、話し合いながら進めました」と竹内さんは振り返る。



体育の授業のデモンストレーションを現地の子どもたちと行っている様子。



マラウイの国営放送向けテレビ番組に出演。



協力隊での経験をいかして国際緊急援助隊の一員としてネパールへ。

青年海外協力隊を目指すみなさんへ

「貴重な経験をどう還元するか?」
これがもっとも大事だと思います。

世界を知りたいと思って参加した青年海外協力隊。私にとっては人生の一つのステップです。現地での過ごし方も大事ですが、帰国してから何をすることがもっと大事。貴重な体験をさせていただいた分、何かひとつでも社会に返すことができたと思っています。日本ではできない経験を、たっぷり味わってきてください。

オセアニアの島々での 伝統の継承を支援したい。



長岡拓也
TAKUYA NAGAOKA

赴任地
ミクロネシア
赴任地での職種(活動分野)
考古学

奈良県橿原市
NPO法人パシフィカ・ルネサンス代表

大学で考古学を専攻し、卒業後、ミクロネシアのポーンベイ州歴史保護局へ3年間赴任。帰国後は、将来オセアニアの文化的な分野で国際協力を行うためにニュージーランドの大学院に16年間留学。博士課程修了後、NPO法人を設立。世界遺産になったナンマトル遺跡にも長く関わっている。今も現地の年配者から聞き取りをして次世代に伝統文化を継承する活動を続けている。

受け継がれてきた伝統文化を未来に伝えるために。

今も1年の半分以上をミクロネシアで活動に費やす長岡拓也さん。オセアニア島嶼国の若者に自国の文化の豊かさに興味を持ってもらい、未来に伝えるために、青年海外協力隊OBや文化人類学研究者らとNPO法人を立ち上げた。数百年、数千年もミクロネシアで語り伝えられてきた伝承を未来に継承するため、ビデオで記録し、インターネット等で公開する活動を行っている。ミクロネシアでは、失業率が高く、若者を中心に人口の3分の1がアメリカに出稼ぎに行っている。また若者達は伝統文化への興味を

失っており、若い世代へ伝統文化を継承することが難しくなっている。現在、長岡さんは、伝統文化の継承活動をポーンベイ州中心に行っているが、いずれは他の州や地域へも広げていこうとしている。2、3か月に1度しか船が出ない離島へ渡り、伝承を記録する。「島の人がアクセスできる歴史や文化の情報が少ないので、インターネットを利用して学習できるような教育事業を立ち上げたいですね。ミッションを共有する政府機関や団体と組んで、大きな運動にしていくというのが将来の目標です」。

人生観が大きく変化した ミクロネシアでの充実した日々。

子どもの頃から化石や恐竜が好きで、大学では考古学を専攻。サイクリング部に入り、野宿したり山に登ったりと冒険的なことが好きだった。4年生で大学院に進学しようと思った矢先、青年海外協力隊に考古学という職種がある事を知り、さっそく応募することに。卒業後、訓練を受け、7月から派遣された。長く休館していた博物館を1年後に再開させた後、失われつつある伝統文化を残すため、任期を1年延長して帆走カヌー作りをビデオで記録した。「現地での活動では専門性に加えて、バイタリティが大切でした。異文化の中に一人おかれ、現地での人の死を間近に見て、これからどう生きていくか考える機会を与えてもらいました。協力隊の3年間でその後の人生が、がらっと変わりました」。



今も1年の半分はミクロネシアへ赴き、活動されている。

精力的な活動が実を結び ミクロネシア初の世界遺産に。

現地では、現地の人の目線になり、言葉もマスターした。「お前はミクロネシア人だと言われるとうれしいですね。初めて行った外国だったので、インパクトが強かったんでしょうね。自然と調和して、伝統の中で生きて、地域のつながりを大切に…。現地人になりきって、すっかりはまっていました」。

国際協力チームに参加し、地道な活動を続ける中で、2016年ナンマトル遺跡がミクロネシア初の世界遺産に登録されたことは、大きな成果だといえる。次は、ヤップ島の石貨遺跡の世界遺産への登録に向けて協力活動を行っている。



将来的には日本とミクロネシアやオセアニアとの友好関係に貢献していきたいと話す長岡さん。

研究仲間に
聞く!



関西外国語大学 国際言語学部 教授 片岡 修さん

長岡さんとは世界遺産登録が決定したナンマトル遺跡での共同フィールドワークや研究を含めて、20年以上の付き合いがあります。ポーンベイ島をこよなく愛している彼は、現地入りするとまさに水を得た魚状態。研究だけでなくその成果の啓発活動にも熱心で、間違いなく将来活躍してくれる人物として期待しています。

親から子へと伝える技術の 帆走カヌーづくりを記録。

人口150人の電気もない離島へひとり渡って約5か月間滞在し、そこで7mの帆走カヌーの製作技術を記録・継承するプロジェクトを実施した長岡さん。本来帆走カヌーをつくることは、生活に必要な技術として親から子へと伝えてきたが、船外機付きのボートに取って代われ、この技術がとだえてしまうという危機に瀕していた。そこで長岡さんは、講習会を開き、映像を記録しながらつらくろうと計画。「けれども昔かたぎの長老には、『一番秘密である帆の作り方は、島の習慣で自分の子供にしか教えない』と言われ、教えてもらうのに苦労しました。『今これをしないと永遠に失われてしまう』と説得しました」。

ところが、講習会になると長老は教えるという

より自分達でどんどん作っていった。20人いた若者ももともとあまり興味がなく、だんだん減っていった。最後には2人になったが、何とか帆走カヌーを完成させることができた。「進水式でみんなに祝ってもらったときは、とてもうれしかったですね。島を離れる時は感極まって泣いてしまいました」。



帆走カヌーの製作技術を記録し、講習会を行うプロジェクトで完成したカヌー。70代の先生方とともに。



島で2人しか知らない機織りの技術を若者へ継承するために同僚と開催した講習会の様子。しかし、現地人は伝統文化に興味を失っており、生徒は外国人ばかりで、衰退する伝統技術を継承する難しさを痛感した。

青年海外協力隊を目指すみなさんへ

精一杯あがきながら、 人間力を磨いてください。

日本では、なるべくみんなと同じがいいという風潮がありますが、赴任先では一人ですべてできるかが試され、交渉など対人能力が要求されるので、人間としての総合力がアップすると思います。現地ですべてをこなしながら、精一杯あがいてみてください。これからの人生において原動力になるようなものを得られ、人間的な成長ができると思います。



踊りの講習会のメンバーと。

大好きなバレーボールを通じて、 出会った人々に恩返しをしたい。



梅崎 さゆり
SAYURI UMEZAKI

赴任地
エチオピア
赴任地での職種(活動分野)
バレーボール

奈良県天理市
天理大学 体育学部 講師

小学5年生から大学までバレーボールひと筋。教員を目指して教育大学に進学し、大学4年生の時に青年海外協力隊に応募。赴任先のエチオピアでは、バレーボールのナショナルチームを結成するための選手選考・育成、指導などを行った。帰国後、天理大学の講師となる。

バレーボールの魅力伝え、追究する日々。

オリンピックなど名だたる国際大会に、多岐にわたるスポーツ選手を送り出している天理大学。スポーツ振興と国際化に力を入れているこの大学で講師を務める梅崎さゆりさんは、ゼミで15名ほどの体育学部の学生の指導を任されている。授業でバレーボールを教えるだけでなく、バレーボール部の顧問も務める。また、同大学が行っている国際スポーツ交流実習のコーディネーター、引率者として海外ツアーにも帯同。主にドイツのケルン体育大学に行き、学生たちの実習

のサポートを行っている。今年は27名の学生を引率する予定。「学生は現地で、さまざまなスポーツに挑戦します。私も、自ら進んで得意なスポーツにも参加して、積極的にチャレンジする姿を学生たちに見せるようにしています」。その一方で、現在、京都にある大学院の博士課程にも籍を置く大学院生でもある。バレーボールの視覚探索の研究で、視線や動作分析を行っている。「エチオピアで学んだ『目の前の自分のできることをしっかりやろう』という気持ちで、一生懸命取り組んでいます」。

守ってばかりの姿勢を変えたかったんです。

青年海外協力隊を目指した理由は、「このまま体育教師になっても、私はバレーボールのことが知らない。人間の幅が狭すぎる。もっといろんな経験をしたい」と感じたからだ。「それまでずっと守りの姿勢で、失敗したくない性格でした。協力隊への応募をきっかけに、自分の器を大きくしたいと思って行動するようになって、少しずつ拓けてきました」。赴任先のエチオピアバレーボール連盟では、育成年代の指導と強化を目標に活動し、先輩隊員が残っていた指導ガイドブックもリニューアルした。また、エチオピアバレーボール連盟のテクニカルヘッドと協力して、指導用のDVDを完成させることができたことは、自信になりました。



学生やスタッフからも「梅ちゃん」と呼ばれる人柄からか相談されることも多いそう。



視線や動作分析の研究がバレーボール部の活動にもいかされている。

さまざまな価値観を学び、 自信が芽生えてきました。



エチオピアに行くまでは、「教える立場」として赴く思いが強かったという梅崎さん。「実際には、何もない生活の中で、物質的ではない豊かさや当たり前のことに感謝する気持ちを知り、教えられることのほうが多かったです」。今は、「世界の笑顔のためにプログラム※」で、大学で不要になったスポーツ用具を途上国に送っている。「隊員になったことで、幸せを感じる物差しが変わりましたね。どこでもやっていけるという自信もつきました」と語っている。

※開発途上国が必要とされている、スポーツ、文化、教育、福祉など、関連物品の提供者を日本国内で募集し、JICAが派遣中のボランティアを通じ、世界各地に届けるプログラム。

上司に
聞く!



天理大学 体育学部 教授 医学博士 近藤 雄二さん

体育学部の学部長として梅崎さんと面接する機会があり、青年海外協力隊での経験をはじめ、学術的研究活動をしっかり行っている印象を持ちました。入職後、国際スポーツ実習(ドイツ)の担当を依頼したのもその時に印象に基づくものですね。

困難を乗り越えた末に 信頼関係を築きあげた喜び。

赴任先では、多くの人の信頼を集めているエチオピア人の同僚がサポートしてくれたおかげで、活動は最初順調に進んでいた。ところが1年を過ぎてその同僚が渡米し、「それからが大変でした」と梅崎さん。「やはり現地の人間がエチオピア代表の監督を務めるべきだ」という意見によって突然代表監督を解任され、加えてジュニアチームの解散を告げられる。そこではたと気づいたという。

「それまでその同僚とばかりコミュニケーションを取っていて、他の人とはあまり話をしていなかったのが原因でした」。

ひとりになって初めて、信頼関係の構築の大切さを痛感。新たにクラブチームの巡回指導を始めて、徐々に、現地の選手やコーチ

に頼りにされるようになった。ある大会で優勝した時、選手がメダルを首にかけてくれ、「さゆりのおかげだよ」と言ってくれたことは、共に過ごし、活動してきたことが実を結んだ瞬間だった。



クラブチームが優勝した時の祝勝会の様子。



コーチ養成講習会で講師を務める梅崎さん。



エチオピア女子代表チームと記念撮影。

青年海外協力隊を目指すみなさんへ

自分の限界を勝手に決めず、 チャレンジ精神で挑んでください。

私は、海外に出て初めて、それまでは無理と思っていたことがどんどんできるようになりました。それを今、学生に還元できると思っています。家族に反対されたり、自分で可能性を否定したりして、自分で限界を決めてあきらめてしまうことが多いと思いますが、一度きりの人生だから、ぜひ、チャレンジしてみてください。



青年海外協力隊

検索

<http://www.jica.go.jp/volunteer>

独立行政法人 国際協力機構 (JICA) 関西国際センター

〒651-0073 兵庫県神戸市中央区脇浜海岸通1-5-2

Tel: 078-261-0341 (代) Fax: 078-261-0357